

## 第2部 シンポジウム

# 歴史流れる熊野川を語る

～ 世界遺産と文化、暮らしと災害～

平成 16 年 10 月 30 日(土)

新宮市立丹鶴小学校体育館

主催 近畿地方整備局紀南河川国道事務所

共催 熊 野 川 懇 談 会

出席者

(敬称略)

パネリスト 神坂次郎 (作家、劇作家)  
橋本卓爾 (和歌山大学経済学部教授)  
山本殖生 (新宮市熊野学情報センター準備室長)  
松村一男 (京都大学防災研究所地震予知研究センター助教授)

司 会 赤井由賀里 (株式会社和歌山放送 アナウンサー)

文中では敬称を略させていただきます。

## 司会（赤井）

お待たせいたしました。熊野川懇談会第2部パネルディスカッションを始めさせていただきたいと思います。第2部の進行役、引き続きまして赤井由賀里が担当させていただきます。体育館の壇上というのは、小学校の学芸会以来ということで、いささか緊張しておりますが、よろしく願いいたします。（拍手）

第2部では、壇上にいらっしゃいます4人のパネリストの方々に、ざっくばらんに熊野についての思いとか熊野川に関するお話などをしていただこうと思っております。

では、早速パネリストの方々をご紹介しますまいります。壇上右側からご紹介いたします。

橋本卓爾先生です。和歌山大学の経済学部教授でいらっしゃいます。（拍手）

都市と農村の共存に関する研究、また都市農業、中山間地域農業の保全と活性化、リバーツーリズムなどに関する研究をしていらっしゃいます。食や農業に関するご本をあらわす傍ら、現在、毎週木曜日の朝、和歌山放送ラジオを通じまして、まちおこし、むらおこしについて卓見を披露されています。人気パーソナリティーでいらっしゃいます。

そのお隣、山本殖生さんです。（拍手）

新宮市役所勤務の傍ら、熊野の歴史や伝統文化の研究を続け、現在は熊野学情報センター準備室長として、高野・熊野の世界遺産登録に重要な役割を果たしていらっしゃいます。これまでも、多くの雑誌、また本を書かれまじたり監修され、熊野の歴史、文化、信仰を全国に発信していらっしゃいます。

そのお隣、皆様おなじみの作家、劇作家の神坂次郎さんです。（拍手）

和歌山市にお住まいで、歴史に大変詳しく、これまでも多くの歴史にまつわるお話を書いていらっしゃいます。特に、「元禄御豊奉行の日記」、「縛られた巨人 南方熊楠の生涯」など、ベストセラーになりまして、人々の注目を集めました。和歌山県の歴史、特に紀南の歴史に詳しくいらっしゃいます。熊野古道の世界遺産登録では、NHKの番組にも出演されまして、熊野の歴史について解説をされました。

そして、皆様の向かいまして一番左側、京都大学防災研究所地震予知研究センター助教授の松村一男さんです。（拍手）

地震予知の専門家でいらっしゃいまして、地震が起こる原因からその発生に至るまで、動き、発生時期、地震についてのさまざまな現象を研究されているということでございます。

そして、きょうのテーマが、歴史流れる「熊野川」を語る～世界遺産と文化、暮らしと災害～ということで、さまざまな角度から熊野のこと、お話を進めていきたいと思っております。進行の方は、

基本的には私がパネリストの方々に質問をするという形式で進めてまいります、その話題につきましてご意見のある方は、ぜひご遠慮なくご発言をいただきたいと思います。楽しくディスカッションを進めていければと思っております。

さて、きょう、私、こちらに紀勢線でやってまいりました。雨の中だったんですが、熊野古道を訪れる方なんでしょうね、たくさんの方が乗っていらっしゃいまして、紀勢線満員でした。それを見ながら、雨の日も風の日も、よみがえりの地を目指して、平安時代の人々はこちらの方にやってきたんだと、そんな姿を重ねまして、時代が変わっても、人々の求めるものは同じなのかなというふうに感じました。

それでは初めに、パネリストの皆さんにとりまして、熊野川とは一体何なのでしょう。熊野川への思い、熊野川とのかかわり、また熊野は初めてという方もいらっしゃいますので、熊野川に対して持っているイメージ、印象など、できれば、問題点も含めまして、お聞かせいただければと思います。

初めに、神坂さん、いかがでしょうか。

### 神坂

熊野というと、私が覚えているのは、プロペラ船が盛んに上下しておったところでありまして、そのころ私、土木建築の世界にいましたので、あのあたりを随分歩いたのを覚えております。プロペラ船は、すごく親切な人で、土木屋の男が岸辺に立って手を振ると、寄ってきてくれたりして、乗せていってもらった覚えもあります。雨で足元の悪いところに、地下足袋を履いて、滑らないようにそれにわら縄をくくりつけて、ダイナマイトを担いで、雷管を腹に巻いて - - 雷管というのは危ないもので、転ぶとたちまちに飛んでしまうんです。私、ダイナマイトのライセンスを持っておりましたので。

さっきスライドを拝見しまして、そういうころの熊野、すごく懐かしい思いがしました。熊野というのは、やはりすばらしいなと思ったですね。日本の歴史が始まったころから熊野があるわけで、スライドを拝見しておりますと、日本のどこよりもすばらしいなと思えましたね。

よく言うんですが、熊野古道と言いますが、歴史を知らなければ、ただの田舎道です。苦しいばかりの田舎道です。熊野川というのは、歴史を知らなければ、ただのただっ広い川なんです。歴史を知ることに、そのすばらしさがある。それが我々に与えられた、紀州人の一つの思想じゃないかと思えます。

この前もあるテレビで、随分長いこと1日以上座ってしゃべったりしていましたが、紀州人の不幸というのは、どこの土地へ行っても、美しい景色を感じないことですよと言うと、アナウンサーがぼけっとしていましたが、それほど、どこへ行っても、海を見ても、山を見ても、美しく感じない。先ほどのスライドをごらんになったらよくわかりますが、あれはすばらしい作品でありました。

その熊野の近くに自分がおれる、熊野を何度も歩ける、熊野川を何度もさかのぼれる、それが、私なんかみたいに、紀伊半島の片隅に住んで、細々と小説を書いている者の一つの誇りだと思っております。

**司会（赤井）**

ありがとうございます。

では、続きまして、山本さん、お願いします。

**山本**

私は、新宮市の高田で生まれました。昔は、高田村だったんです。小さいころから、熊野川で魚をとったり、いろんな遊びをしまして、非常になじみが深いんです。子供のころ、うちのおやじがとったアユというのは、サバぐらいあるなと思いました。子供なので、そう思ったんだと思いますけれども、大体高田の人間は大きなことを言うんですけども、（笑）それぐらい大きなアユがいたわけです。

高田口というところがありまして、あそこから高田に入っていくわけですが、「かわと」と呼んでいるところがあるんです。バスでおりて、そこから高田に入っていくんですが、「かわと」というのはどういう意味かなと思って、村役場で調べましたら、「川渡」と書いてある。要するに、浅里村と高田村を結ぶ渡し船があったということで、それが最近になってわかりました。私もぼんやりしたものです。若いときから川遊びばかりしてしまっていて、勉強ができなかった。川遊びせなんだら、もうちょっと賢くなっていたと思うんですが、最近、熊野川にこだわって調べていましたら、いろんなことがわかってきました。今回、熊野川も世界遺産になりましたし、本当にふるさとのおかげで、ありがたいなと思っております。

## 司会（赤井）

サバのような大きいアユということですが、このあたりは落ちアユ漁が盛んということで、アユの話、オチがございました。（笑）

では、橋本さん、お願いします。

## 橋本

私は、出身が広島県の山奥でありまして、熊野川とは全く縁がなかったわけでありまして。熊野川との最初の出会いは、今から30年ちょっと前だと思います。私事にわたって恐縮ですが、結婚した年の次の年に、2人で瀨峡を見に行きまして、すばらしい風景だなと感銘をいたしました。それが最初の出会いでありました。それからずっと出会っておりません。

そして、10年ほど前に和歌山大学に赴任しまして、いろんな関係で、新宮市等お邪魔する機会が増えまして、またぼちぼち熊野川との出会いが始まりました。しかし、それも、丹鶴城へ上って、ああ立派だな、きれいだな、あるいは本宮町あたりから新宮に来る途中に、あの雄大な風景を見て、すばらしいなと思う程度でございました。

今回縁がありまして、熊野川懇談会に参加させていただきまして、ここで本格的に少しは熊野川のことを勉強してみたいと考えておりますので、今後ともよろしく願いいたします。

## 司会（赤井）

ありがとうございます。

そして、もう一方、松村さんです。松村さんは、熊野が初めてということですので、熊野に持っていらっしゃる印象とかイメージをお話しいただければと思います。

## 松村

私は、出身が京都なもので、海のないところに住んでいたわけなんです。大学へ入りまして、地震の観測で、先ほど何でもやっているようなことをおっしゃいましたが、やっていることの一つに、人工地震の探査というのがあります。それは、地震計をライン状に設置しまして、ダイナマイトを何カ所かで破裂させて、それを観測するというもので、学生時代から30年ぐらいやってきたわけです。

それで、全国各地、いろんなところへ行くんですけども、残念ながら和歌山はそれまで来たことがないんですね。以前も和歌山で観測はあったんですが、観測するときには京阪神に近い方を受け持たされるので、和歌山まで来れない。来月の中旬にも、南北測線で、紀伊半島から丹後半島までぶち抜いたものをやるんですけども、そのときも、熊野古道には入りますが、奈良県側からちょっと入ったところで観測をしようと思っております。

だから、熊野に対する印象が余りなくて、和歌山というと、和歌山市の北の、どっちかという大

阪の泉南郡にひっついてる辺を想像するんです。きょう委員長に選出された江頭さんから、熊野川懇談会で話をしてくれと言われて、何のことかわからへんかったんですが、きょう初めて来たわけです。熊野とか熊野川とか、神坂先生がおっしゃったプロペラ船とか、そういう断片的な知識はあるんですが、ああやっとな熊野に来たという感じです。

広い川を見るというのは、非常に心休まるし、いいんですけども、残念ながら、きれいな川で広い川というのが、日本でだんだん少なくなってきました。最近はずつときれいにはなっていますが、だれもが川面に立って見たときに心が和むという川が、私の川に対するイメージで、そういうことに取り組んでいかれるというのは、非常に感動します。

### 司会（赤井）

これを機に、ぜひ何度も訪れていただきたいと思います。

松村先生は、地震予知の方のご専門ということで、後ほど南海・東南海地震が予知できるのか、そのあたりをお聞かせいただければと思っております。

さて、きょうのテーマが熊野川を語るということですが、まずこれまでの熊野川の歴史を振り返ってみたいと思います。

神坂さんは、もう何度も熊野を歩かれまして、熊野の歴史に関する本もたくさん書いていらっやいます。人々の生活というのは、川と密接したものだと思いますが、流域の人々は、熊野川とどんなふうにかかわりながら生きてきたのか、そのあたりのお話をお聞かせいただけますでしょうか。

### 神坂

私なんか、すぐ歴史のことを思うんですが、いろんな語り伝えが川べりにあるわけなんです。そこで人々が生活していたことを思うと、歴史の膨大な流れ、人間なんて、幾ら頑張っても、100歳以上生きられないんですが、日本が始まったところから流れている川がまだそこにある。それを見ると、南方熊楠ではありませんが、大自然というものを物すごく尊敬する気になります。まずそれだと思いますね。熊野三山の神というのは、全部大自然でありますから。昔からあった大自然を目の前に見られるというのは、我々の一番恵まれた点ではないかと思うんです。

もちろん、川というのは、ちょっと手を緩めると猛威を振るう。明治22年の大水害のようなことがあるんですが、そういうことも自然の営みの中の一つと思って、みんなが住んできたわけなんです。例えば、自然の破壊は人間の破滅につながるということは南方熊楠が言っておりますが、産業革命の後惨たんたる状態になったイギリスの原野を見てきているわけです。そういう熊楠が言ったことが、ようやく八十何年目にナショナルトラスト運動ということになった。この間も全国大会が天神崎でありましたが、熊楠の言った言葉が「万物共生」と。ともかく、岩影のコケにしても、カビにしても、

人間にしても、亭々たる大木にしても、みんな同じ価値であると熊楠が言った。これは熊野の大きな思想ではないかと思えますね。

ですから、熊野の大自然を見ると、昔の人は手を合わせて拝んだ。川べりの村々の人は、みんな川に手を合わせた。例えば、有田の方にある堤防ですが、その堤防へ上るときには履物を脱いだというんです。ある代官が堤防をつくって、予算が超過した。超過は当たり前なんです。もともと予算がないんですから。それを承知してやって、腹を切っているわけですね。そういうものが熊野にもいっぱいあるんです。

奥熊野のことで、私も作品に書いたものがありますが、そういうのを訪ねていけば、先人がこの大自然の中でどうして必死になって生きようとしたか、そういうものを知るのが歴史だと思いますね。ただ、古い話だけを知って何とかじゃないわけですよ。

例えば、熊野古道の語り部という人たちが随分おります。私は、もっとふえてほしいと思うんですが、熊野川の語り部というのが、この流域でできてほしいんです。土地の人が土地の歴史を語る。そういうことがやっぱり一番強いんです。土地に生まれて、土地に育った古老が、歴史をしみじみとした語り口で語る。これがよそから世界遺産になった熊野を訪ねてきた人へのおもてなしの第一番だと私は思います。お土産に持って帰ってくださいという話をできる古老というのは随分おられると思いますが、それだけを今度はちょっと期待をしているんですが。

#### 司会（赤井）

先ほどプロペラ船というお話も出ましたが、そのルーツは筏流しということなんですか。

#### 神坂

そうですね。うちの実家が材木問屋なんですが、私は、家業を嫌でこっちへ来ましたけれども、筏を見ると、家の血というんですか、代々の血というのがありまして、すごく懐かしいんですよ。

新宮なんかへ来ても、昔あったという、私、知りませんが、河原に小屋を立てて、河原町という大きな町ができたという話も、物の本でしか私は読めないんですが、そういうのも、この一番いい時期に再現してほしいような気がしますね。それだけ栄えたと。できないのなら、ミニチュアでもいいんです。例えば、筏のミニチュア、プロペラ船のミニチュア、河原町のミニチュア、そういうものを観光に来た人に語れるような、目で見られるようなお話というのをつくってほしいと思います。

#### 司会（赤井）

今出てまいりました河原町というのは、このあたり独自の文化のようですね。

#### 神坂

今で言うと、プレハブですよ。簡単に組み合わせて、水が出そうになると解体して持って上がる。



これはよそで余り見ないんですよ。熊野人の賢さというんでしょうか、そういうもので、壮大なる町を河原につくったと。あの広い河原ですから、どこにもつくれるはずなんです。だから、災害対策というのも常に心得ているんですね。川のすばらしさ、川の怖さというのも知っているわけです。そういう町が突然できて、突然また消えるというのは、今から考えますと、すごく楽しいですよ、

**司会（赤井）**

それは明治ぐらいまであったようですね。

**神坂**

そうらしいですね。残念ながらそれを見ることはできないんですが、もう一度どなたかが、ミニチュアで結構ですから、やってほしいなと思います。

**司会（赤井）**

新宮高校の生徒さんが、もう少し小さいものを再現したりはされているようですね。

**神坂**

それは私、存じませんで、それならすばらしいですよ。そういうのをもっと広げて、公開の場に出してほしいですね。

**司会（赤井）**

そうですね。河原に本当に町ができていたということで、宿屋さんがあったり、鍛冶屋さんがあったり、床屋さんがあったり、銭湯もあったというふうに……。

**神坂**

大きなところに、そういう小さいミニチュアがずっとあると、例えば新宮に来られた観光客に説明するのに、一番いいものじゃないかと思いますね。

**司会（赤井）**

ぜひそれを再現してほしいですね。

**神坂**

そうですね。

**司会（赤井）**

その河原町から見える熊野の文化というのは、神坂さん、どのようにお考えでしょう。

## 神坂

熊野の文化というのは、随分奥が深いので、なかなか一言には語れないですが、熊野の奥深さというのが、例えば瀨ですね。瀨というのは、昔から知らないんですよ。西行があそこへ来たときに、瀨を知らないんです。恐らくあれは明治のころでしょう。そのころしか発見されていないんです。

## 司会（赤井）

来ているのに、その場所に気づかなかったということなんですか。

## 神坂

観光地になっていないんですよ。例えば、若山牧水が勝浦へ来た。魚を食いに来たんです。温泉じゃなかったんですよ。温泉はもうちょっと後なんです。あの人は酒飲みで、そういうものが好きでというんですが、その人の記録を見ても、ともかく魚、魚、魚で、町じゅうに魚が転がっているというふうなことで書いております。だから、あるときを機にしてぼんと出るんですよ。

例えば、祭りにしても、いつかできたんです。昔からある祭りなんてないです。だから、こういう機会にそういう祭りをつくればいいんですね。そうしたら、ここから100年後でも、昔からあったものとして語り伝えられる。

例えば、南方熊楠が80年前に、天神崎の自然を残そうと言ったら、また南方先生はほらを吹いてなさと笑ったというんですが、それが重層低音のように田辺のまちびとの中に残っていて、日本で一番先にナショナルトラスト運動が始まった。そういうのをまずつくってほしいですね。

## 司会（赤井）

奥が深いだけに、この地独特のものがたくさんあるということなんでしょうね。

さて、そんな熊野が今回世界遺産に登録されました。山本さんは、その登録に関しまして大変重要な役割を果たされたということなんですが、建造物とか遺跡という、点ではなくて、広大な地域を対象にしているということで、やはり独特の世界遺産ということになりますよね。

## 山本

ご存じのように、吉野・大峯と高野山、そして熊野、それを結ぶ参詣の道ということなんですけれども、ほとんどが熊野古道なんですね。川の古道ももちろんあるわけなんですけれども、非常に広い地域にまたがっていますので、これを一くりにして世界遺産に持っていくというのは、大変苦労が多かったわけです。

## 司会（赤井）

どのような点、苦労されましたか。そして、決め手となったのは何なんですか。

## 山本

まず苦労したのは、所有者、管理者のご理解をいただかないかぬということがありますし、それぞれ地元の市町村では、条例をつくってきちんと地元で守りますよということを示していかないかぬということがあります。新宮市なんかでも、世界遺産の条例をつくりまして、議会のご承認をいただいたわけですが、僕も胃が痛くなりまして、夕べ飲み過ぎたんかどうかわからぬぐらい厳しかったんですけども、何とかご理解いただきました。

しかし、今回の世界遺産、大事なのは、山岳霊場ということと、文化的景観ということです。吉野・大峯、高野山、熊野三山というのは、日本を代表する山岳霊場です。都から見て南にあって、ちょうど適当な距離にあった。それが自然豊かで、当時流行した浄土信仰といいますか、まさに仏の理想世界がそこにあるんだという感覚で、大勢の人たち、上皇貴族から始まって庶民まで参詣をした。そういうメジャーな霊場がここに展開をされた。それが山岳霊場として非常に重要だということで、世界遺産になったわけです。

もう1つは、文化的景観ということです。これは、自然に対して人間が手を加えながら長い時間をかけて形成してきた風景、景観なんですね。熊野古道なんかはその典型ですけども、昔の歴史にタイムスリップしたような、そんなすばらしい景観がいまだに息づいている。そういったものをこれから大事にしながら、我々の魅力を世界にもっともっと発信しなければいかぬということなんです。

## 司会（赤井）

世界遺産登録というのは、日本では12番目で、道を含むということでは、世界で2つ目ということですね。そして、その中に川が参詣道として含まれているのは世界で初めてというふうに伺ったんですが、山本さんは、この川の道、川の参詣道、熊野川の持つ意味をずっと主張していらっしゃるんですよね。その辺のところをお話しいただきたいんですが。

## 山本

僕は、飛行機が嫌いなので、世界的なことはよくわかりませんが、今回川の熊野参詣道ということで、熊野川が世界遺産になったわけです。僕も、少しこだわって最近調べているわけですが、確かにおもしろいですね。結論から申し上げますと、ガンジス川なんかには絶対負けない聖なる川なんです。熊野本宮大社、先ほど水害の話がありましたけれども、明治22年までは中洲にあったわけです。流されるようなところにあった。これはなぜかということ、洪水を鎮圧するために、あそこに祭られたんだと思います。あそこの大斎原という島の形は、亀に似ているんです。皆さんそうイメージできませんか。亀の形によく似ているでしょう。これはうその話ですけども、あそこには蓬萊山があって、亀がすんでいるんだという伝承があります。亀がしっぽから油を出すので、熊野川のこ

とを油川と呼ぶと。これは、ちょっとイメージが悪いんですけども。

新宮は、皆さんご存じのように速玉大社と言います。これは速い玉ですから、熊野川の水の勢いそのものを神様と考えてお祭りしてきたんです。先ほど御船祭の写真がありました。速船競漕ばかりみんな写真を写すんですが、後から行く神様が乗っている赤い船が大事なんです。あそこで御船島を3回葬式回りで回るといのが重要な儀式なんです。神様が鎮座したいわれをあれで再現しているわけです。ですから、速玉大社も、熊野川そのものを神様として祭ってきたというのがわかるんですね。

河口付近には飛鳥神社があります。これはおもしろいですね。飛鳥神社というのは、熊野灘の潮が新宮に上っていかないために、あそこで守っている、要するに河口の守護神なんです。そして、熊野川には大きなサメがすんでいたという伝承があります。これは、最近の研究では、ひょっとしたら、河口に広がる砂洲のことではないかというふうに結論づけられています。ご存じのように、しょっちゅう河口付近が砂洲で詰まってしまうわけですね。そういったことを守るために、飛鳥神社というのがあそこに鎮座しているんだということなんです。そういった記録もあります。

そういう意味で、この熊野川、特に河口付近の景観というのは、まさに世界遺産らしい文化的景観をよく伝えている。そういう地域だろうと僕は考えています。

#### 司会（赤井）

そして、熊野信仰というのは、熊野川がなければ成立しなかったとも言われていますね。

#### 山本

そうですね。本宮、新宮を結ぶ重要な河川交通です。古代中世までは、本宮へお参りした人は、必ず四、五時間かけて新宮まで下って、那智へ行って、もと来た道を引き返しています。上下で熊野川というのを参詣道として利用しているわけですから、大変重要だったというのがわかります。

#### 司会（赤井）

そして、川に関所があったというふうにも伺ったんですが、これも大変珍しいですね。

#### 山本

川関と呼んでいるようですけども、どういうふうな形態だったのか、僕が想像しているのは、ロープでも引っ張って、船をちょっととめて、おい待てと。そして、川ざらえといいますか、川を修復するために料金をいただく。そういう形態だったと思うんですけども、浅里とか田長あたりに関所があったというふうに記録の上では出てきます。

### 司会（赤井）

調べれば調べるほどいろいろなことが出てくる熊野川のようですね。

さて、その熊野川を含めるこの熊野地域、世界遺産に登録されたわけなんですけど、これからのあり方、守り方というのも難しいのではないかと思いますけど、地元の方の意識も含めまして、そのあたり、どうなんでしょうか。

### 山本

世界遺産で苦労した話の中にもう1つ入れたかったのは、地元がもう一つ燃えていなかったということがあります。これは、僕らの説明不足もあったかもわかりませんが、各地を回って説明会もしたんですが、ほとんど人が集まってこない。世界遺産で何かないという感じで、割と冷やかだったんです。ここへ来て、おかげで随分盛り上がってきました。

そういう面で、これから世界の宝物を守っていくのは地元住民ですから、もっともっと意識を高めて、そして行政も住民も一緒になって、これからこのすてきな世界遺産というのを守っていきたくて、継承していきたくてというふうに考えています。

### 司会（赤井）

これまではまだまだ意識が薄かったということなんでしょうかね。

そして、この地域は、過疎の問題も抱えていると思います。今、65歳以上の高齢者が、このあたり40%ということのようですね。超がつく高齢社会だと思います。そして、林業は衰退しましたし、木工製品の生産のような産業があるということですが、これに関しましては金額が小さいということで、課題がとても多いようです。

橋本さんは、地域振興、リバーツーリズムで、県内各地を飛び回っていらっしゃるんですが、この現状をどのようにごらんになりますでしょうか。

### 橋本

今の山本さんのお話を聞いて、この熊野地方、あるいは熊野川が非常にすばらしいものだということがじんと伝わってきました。私、農業経済とか地域経済を専門にしております、そういう側面から言いますと、今赤井さんもおっしゃっていますように、熊野川、あるいはその流域は、非常に危機的な状況にあるというふうに考えております。ちょっとオーバーな表現かも知れませんが、3つの危機が今押し寄せていると思います。

1つは、大変な過疎地域ということなんです。過疎化がどんどん進んでいる。しかも、全然歯どめがかからないということなんです。年々過疎化が進んでいる全国有数の過疎地域であります。

2つ目は、高齢化がどんどん進んでいるということなんです。2000年の国勢調査で見ますと、日本の65

歳以上の人口の構成比は17.3%ですが、熊野川流域の市町村で見ますと、30%台、40%台は普通であります。ちょっと具体的な数字を言っておきますと、例えば十津川では34.4%、下北山村では38.4%、紀和町では49%ですから、約半分が65歳以上ということになっています。それから、本宮町で37%、北山村で41%と、こういうように高齢化が非常に進んでいる。しかも、高齢化が進む中で、後期高齢化といいますが、75歳以上の年齢構成が20%前後を占めております。5人に1人は75歳以上なのです。

こういう人口構成になっておりますから、5年あるいは10年先どうなるかというのは、非常に厳しいものがあります。地域の担い手、そして熊野川の守り手がどんどん少なくなっている。また、高齢化がどんどん進んでいる。これが2番目の危機的な状況であります。

3つ目は、この地域の基幹的な産業である林業、あるいは農業が、産業構造の大きな変化の中で、あるいはグローバル化の進行の中で、非常に厳しい状況にあります。産業として成り立たない。頑張っても、なかなかうまくいかないという非常に厳しい状況に追い込まれているということがあります。

そうした中で、山が荒れ、農地がつくられずに放置されるという状況になってきております。そうしますと、食料の生産、あるいは木材の生産だけでなく、農業の持つ環境保全的な機能、例えば洪水の防止機能とか、土砂を防止する機能とか、そういうものもどんどん低下してきます。この地域、今待ったなしの状況でありまして、いかに歯どめをかけていくかということが緊急の課題になっているというふうに考えております。

### 司会（赤井）

今3つの危機というふうにご紹介いただきましたが、これを打破するためにはどうすればいいんでしょう。何が必要なんでしょうか。

### 橋本

これは本当に難しい課題ですが、知恵を出し合って、頑張っていく必要があると思いますけれども、基本的には、地域の担い手、あるいは熊野川の守り手を確保していくということでもあります。人を確保することありますから、この地域から都市に出ていく人をできるだけ抑えていく。もう1つは、都市から熊野川の魅力を感じるような方々をどんどんイターンとかリターンという形で迎えていくということが必要だと思います。そのためには、何としても働く場所、就業の場、あるいは所得確保の場が必要であります。かすみを食っていけない。そうすると、やっぱり働く場の確保が必要であります。

そのためには、1つは、この地域の基幹産業である農業、林業の振興、なかなか難しいですけど

も、これをきっちりやっていくということ、もう1つは、今私一番力を入れているんですが、多様なアグリビジネス、地域資源とか農業とか林業の持つ多面的な機能、役割を生かした新しいタイプのアグリビジネスを興していく。例えば、北山村で、ジャバラを生かしたいろんな新しい取り組みがあります。あるいは十津川村で、温泉を生かしたいろんな取り組みがありますけれども、そうした新しい産業なり新しいビジネスを興していく。そのことによって、就業の場とか所得確保の場を確保していく。そして、若い人が残っていただく、あるいは都市からIターンしていただく、そういう環境をつくっていくことが必要ではないかと思っております。

#### 司会（赤井）

これはどこも抱えている悩みなんでしょうけれども、橋本さん、熊野川を熊野にとって意義のあるものにしていくため、河川整備はこれからどんなふうにしていけばよろしいでしょうか。

#### 橋本

私は、工学的なことはわからないんですが、非常に興味深い調査があります。今、体験学習とか体験型のツーリズムというのが非常に注目を集めておりますが、その関係のアンケート調査がありまして、その結果を見ますと、体験学習の対象としたい場として、河川系に高い関心が集まっています。そういう点では、熊野川というのは非常に重要な意味を持っておりますから、もっともっとトータルとしてブラッシュアップして、景観としても美しい、そして安全な河川をつくっていく。そして、親しく川とつき合いができるような川づくりといえますか、体験学習なり、あるいは体験型のツーリズムとして生かせるような川づくりというのが必要じゃないかと考えております。

#### 司会（赤井）

神坂さんも山本さんも、熊野川に対する思いというのが深いと思うんですが、熊野川をもっともっと磨きをかけるためにはどうすればよろしいとお考えですか。

神坂さん、いかがでしょうか。

#### 神坂

やはり歴史をもっと知ることですね。郷土を愛するというのは、歴史を知れば、郷土を愛するわけなんです。いろんなことができるわけですね。そういう母体をつくっておく。和歌山では何も無いと言われますが、観光立県ということは言えますよね。ですから、観光の面で、PRの仕方、幾らでも人が集まってくるわけですよ。

例えば、京都の八木邸なんか、新選組ということで、物すごいものなんですが、八木邸へ行ったところで、あそこには何も無いんです。今までだれも行かなかった。私らみたいに歴史物を書く者がせいぜい訪ねていくぐらいです。今は猫もしゃくしも、京都駅なんかになったら、新選組のはっぴまで

置いています。若者がちょんまげのかつらをかぶって歩いている。それは観光ですよ。

熊野にはそのねたが幾らでもあるんです。その一例は、昔の女の方の衣装を着て、熊野古道を歩く。それで、夢中になってやってくるわけです。そういう売り方ですよ。郷土のよさ、私は、早い話が観光だと思いますね。切り込み方一つでいけるわけです。和歌山で、産業とか何とかいっても、すぐにはできないんです。だけど、観光というのは、この間なんかでも、中辺路へ観光客が2,000人来たんですよ。そして、あらしのように去っていったというんですが、2,000人あそこへ一瞬にして来るというのは、今までなかったことなんです。これも観光ですよ。そういうのが各所にある。世界遺産になったというのは、千載一遇のチャンスなんです。

売り方というと、例えば、ナギの葉っぱ、あれを1本売ったらいいんですよ。あれは昔宮中の女の人の飾りなんです。国宝が置いてありますから、そのミニチュアみたいなものをつくって、観光客に売るとか、若い人に売るとか、うまくはやらせば、そういう人が喜んで買ってくれる。そういうものが歴史の中に無数にあると思います。いろんな歴史から調べていくと、興味を引くものが随分あると思います。それしかないですね。

#### 司会（赤井）

速玉大社のナギの木の葉っぱをとということなんですね。平忠度という方が熊野川町出身というふう  
に伺いましたが。

#### 神坂

九里峡の途中にありますね。京都のあそこで合戦をしますが、そのときの総大将なんです。熊野育ちの大力で何とかといって、和歌がすごくうまい。川っ縁に、生まれた土地という大きな標柱が立っていたんですが、今すごく品がよくなって、奥へ立派なのが立っていますが、あれ私、余り品がよくななくても、もっと見えるようにした方がいいと思います。それについての口マンをあの土地の語り部の人  
が語ってほしいですよ。お母さんが浜女房なんです。ですから、女の人の語り部がそこで何かを語ってくれる。ちょうどバス停のところですからね。

そういう話が、大阪から来ますと1里に1つぐらいありますよ。小栗判官の話もありますし、熊野の一番奥へ行くと、三十三間堂棟木の由来がありますし、幾らでもあるんですよ。それをこの地域で何とかすれば……。例えば、そういう絵本をつくって、道の駅でも売ってくれるといいんじゃないですかね。土地の人が手づくりの本をつくると。



**司会（赤井）**

宝物をなかなか生かし切れていないというところがあるんでしょうかね。

**神坂**

確かにありますね。

**司会（赤井）**

先ほど女性の衣装というお話が神坂さんの中に出てきましたが、最近山本さんは、女性の衣装を着ていらっしゃるそうですね。（笑）

**山本**

急に振ってきましたですね。（笑）最近、熊野比丘尼にばけまして、あちこちで絵解をやっているんです。本名は殖珍（しげちん）と言いますけれども、（笑）全国各地で恥をかいております。

熊野比丘尼は、戦国時代から全国各地を熊野信仰を絵解をして回ったわけです。そして、浄財を募って、熊野三山の修復費用に充てたということなんです。絵解も、全国的にありますけれども、熊野比丘尼の絵解というのは、地獄極楽の絵図とか那智参詣曼陀羅なんかを絵解したようですけれども、どういうせりふだったのかというのはよくわかりませんので、私、かなりオリジナルにつくって、頑張っております。また一度お聞かせしましょう。

**司会（赤井）**

また一度と言わずに、きょう、ここでひとついかがでしょうか。皆さんぜひ聞きたいですよ。（拍手）

**山本**

パワーポインターで写してやらないとだめですから、きょうはパワーポインターがないようでございますのでやめておきます。

**司会（赤井）**

何かあの辺にあったような気もするんですけども、この次の機会を楽しみにさせていただくということで、じゃあ、次の懇談会でぜひお願いいたします。

山本さんは、その熊野川に磨きをかけるためには、これから何が必要だとお考えでしょう。

**山本**

昔ながらに本宮から新宮まで、何とか船下りができないかなというふうに思っているんです。本宮付近は水が少ないですから、川底がつかえてだめなんですね。熊野川町の田長というところから下ったりしているわけですけども、川船で下りますと、きょうはちょっと言いにくいんですけども、護岸工事のコンクリートが結構気になるんです。確かに、景観はすばらしいんです。伝説の岩

があったり、滝があったり、パノラマ的な展開をしているわけですがけれども、護岸のコンクリートとかプラントが気になりますので、うまく目隠しをしたりとか、何か工夫ができないものかなと最近思っています。船下りも、土日だけでも就航するとか、皆さんに楽しんでいただいて、観光振興につながればいいなと思っています。

#### 司会（赤井）

北山川の筏下りも、大変たくさんの方が、随分遠くからもいらっしゃいますので、そのような船下りができれば、また優雅な感じもいたしますし、たくさんの方がいらっしゃるでしょうね。

#### 山本

昔から結構人気があったみたいで、お酒を積んで、一杯飲みながら遊覧しているんですね。これは江戸時代の話ですがけれども。そして、さかのぼった方がおもしろいよというようなことを書いている人もおります。というのは、ゆっくり時間をかけて景色が楽しめるからです。文化的景観の典型が、この熊野川の渓谷に展開していますので、ぜひとも皆さんにも楽しんでいただきたいなというふうに思っています。

#### 司会（赤井）

あと、熊野川は、ササ立て漁という落ちアユを捕まえる漁があるそうですね。これなども観光に生かすことはできないでしょうか。

#### 山本

最近、僕は、落ちアユ漁をやっていませんけれども、落ちアユ漁のために川船が通りにくいということもありますから、難しいところなんです。余り話のオチになりませんでしたけれども、（笑）落ちアユは大好きでございまして、一杯飲むとおいしいですね。

#### 司会（赤井）

ありがとうございます。

橋本さん、何かございませんでしょうか。

#### 橋本

本当に地元詳しい人のお話ですから、非常に参考になります。歴史の豊かなところですから、そういう歴史の語り部、あるいは昔のいろんなものを再現していくという取り組みも大事ですがけれども、もう一つ、例えば小学生とか中学生を対象にした体験学習を今後取り入れていくためには、自然のことをよく知っている、あるいは川遊びのことをよく知っているインストラクターといいますが、指導員、しかも、若い人たちを確保するということが非常に大事ではないかと思っています。

高知県の四万十川、全国有数の清流でありますけれども、そこも川を使った体験型のツーリズムが

盛んなんですが、その魅力の1つは、川をよく知っている、あるいは川の生き物のことをよく知っている、あるいは川遊びのことをよく知っている若いインストラクターを確保しているわけです。そういう取り組みもこれから必要じゃないかというふうに考えております。

#### 司会（赤井）

ありがとうございます。

さて、熊野川を語るということで、歴史、文化、またこれからの振興についてもお話をしていただいたんですが、どうしても避けて通れない問題がございます。近い将来発生が予想されます南海・東南海地震ということですが、この付近も、9月5日でしょうか、震度5弱の地震が起こりました。また、ちょうど1週間前に新潟県中越地震が発生しまして、大変な被害が出たばかりということなんです。きょう、地震予知がご専門の京都大学の松村さんにお越しいただいていますので、そのあたり、ぜひ詳しく教えていただきたいと思います。

お待たせいたしました。まず、地震予知センターというのが今あるんですね。

#### 松村

京都大学の防災研究所というのがありまして、その中に地震予知研究センターというのがあります。防災研そのものは、工学系の土木とか建築とかもありますし、理学系の気象とか土石流を扱っている部門もあるんですけども、その中の1つに地震予知研究センターというところがあります。もともと我々は、気象庁がそれほど地震の観測をやっていないころに、微小地震といいまして、非常に小さい地震の観測を始めて、その地震の起こり方の研究をしたのが最初なんです。うちの研究所では、そういう微小地震の観測が主体だったんですが、地殻変動の観測、トンネルで地面が伸びたり縮んだり傾いたりするのを観測するといったこともやってきております。

最近、地震観測も、神戸の震災以後、ほかの省庁が大きく展開しましたので、大学はそれほどそちらに重点を置かなくてもいいということになっているんです。ただ、我々のフィールドとして、南海地震というのが一つの大きなテーマでありますので、従来からやっている内陸型の地震と南海地震というのを大きなテーマとして、いろんな観測を行っているということです。

#### 司会（赤井）

南海・東南海地震ですが、これから30年間に起こる確率が50%とも言われていますが、松村さん、どうなんですか。

## 松村

50年の根拠は何かというと、神坂先生のお話にもありましたように、結局は歴史なんですよね。歴史地震というのは、東海道のいろんなところで古文書を探して、同じような地震が起こっているという記録を集めて、解析して、何年に地震が起こったというデータを集めて、統計的に処理をして出しているという話なんです。

神坂先生が、熊野川は歴史が非常に古いところだという話で、歴史が大切だとおっしゃる。そのとおりなんですけど、私どもの立場から言いますと、地球ができてから46億年ですよ。よく例えに出されるのが、地球ができたときが1月1日だったら、人類が出てきたのはいつかということ、12月31日の11時を越えてしまう。そういう自然のレベルで考えれば、人間が出てきてから、まだほんのわずかなんです。そうすると、我々は地震を研究するために地球を見ていますが、我々が観測し出して記録をとったというのは、せいぜい延ばして、100年そこそこです。まあ50年くらいですよ。

そうすると、通りがかりに人の顔をちらっと見て、さっきの人の顔はどんな顔でしたか、そんなものわかるわけがないと。1つはそういう状況なんです。

## 司会（赤井）

わかるわけがないと。

## 松村

まあ新幹線は速過ぎるけれども、急行で、ぱっと通り過ぎて、駅に立っている人の顔をちらっと見て、さっきの人はどんな顔をしていたかと。まして、地球の中を見つけるわけですから。

そういうことなんですけど、もう少しまじめな話をすれば、そういう歴史的なデータをもとにして、再来周期が150年から90年ぐらいに起こっている。要するに、地震というのは、フィリピン海プレートというプレートがありまして、それが紀伊半島の下へ潜り込んでいるわけです。そういうプレートの運動、進んでいる距離というのが、年間五、六センチ動いているわけで、それが100年たつと7メートルとか、たまりますよね。それを解消しないといけないので、何百年に1回ということはないわけです。だから、100年に一遍ぐらいだろうと。そういう根拠から割り出して、50%というのが出てきますけれども、もう少し早くなるかもしれないし、遅くなるかもしれない。

## 司会（赤井）

それはわからないということですね。それだけ難しいものと。いつ起こっても不思議ではないというものなんじゃないかな。起こりましたら、規模はかなり大きいものなんじゃないかな。

## 松村

この間の新潟・中越地震は、震度6強というのがありましたけれども、そのレベルになるんじゃないかと思っています。地震の大きさから考えますと、この間の中越地震がマグニチュード6.8とか、7ってないですね。こちらで起こるのは、8クラス、8.1とかそういうことになると、マグニチュード1ちょっとしか変わらないんですけども、エネルギー的に考えますと、30倍以上、あの地震が30個分ぐらいで起こるわけです。ただ、ここで考えれば、まさに直下なんですけれども、少し下で深いということがありますので、あの程度だろうと。

## 司会（赤井）

パワーは大きいけれども、深いということで。

## 松村

それから、余震がいっぱい起こっていますよね。内陸型の地震で、ああいう群発の活動をするというのがたまにあるんですけども、海溝型の南海地震の場合には、大きな地震が起こって、少し小さな余震はしばらく続きますが、同程度の揺れがどんどん続くということは多分ないだろうと。だから、家はどうもないんだけど、怖くて帰れなくて、避難所にいるというような状況は多分ないだろうと思います。

## 司会（赤井）

ないかわりに、津波というのがありますよね。

## 松村

津波が一番心配なんです。国のいろんな関係で想定しているのが、5メートルぐらいの津波が来るというのがありますが、きょう、紀勢線の海の見えるところをちらちら見ていたんですけども、5メートルというのは、かなりシビアな高さだなと。ただ、津波というのは、なだらかな海岸線の真っすぐなところでは、それほど高くないんです。日本の津波の記録だったら、本州では、38.2メートルというのが東北にありますけど、それは、湾の中へ入り込むと、水が持ち上がって高くなる。きょう、新宮へ来て見ていると、ここら辺は、そんなに湾が入り込んでいるということがないので、それほど津波が高くないだろうという気はするんです。本当にちゃんとやらないとわからないですけど、先ほど休憩のときに熊野川の堤防へ行って見たら、堤防がかなり高い。これだけ高さがあったら大丈夫かなという気はしましたが、まだ海岸線の方は見ていないので、何とも言えませんけれども。

だから、それをどの程度考えるかですね。もしもそれ以上大きく想定して、8メートルを想定して、ここは起こるよといっても、もうどうしようもない。逃げられないですよ。

## 司会（赤井）

それだけ速いということですか。

**松村**

この間から少し計算してみたんですが、5分はかかります。揺れが来てから、5分か10分ぐらいの間と。ただ、揺れが来てから、逃げる気になるかどうかもありますし、そこら辺が微妙なんですけれども。

**司会（赤井）**

逃げるのがいいのか、例えばそのまま自宅にとどまって、2階に上るのがいいのかと。

**松村**

ええ。だから、そのときの規模がわかればいいんですけども、残念ながら津波が起こった途端、すぐ高さがわからないので、なるべく最悪の場合を考えて行動してほしいというのはありますけれども。

**司会（赤井）**

そうしますと、対策、そして日ごろからの心構えというのは、どんなふうにしておけばいいでしょうか。

**松村**

立派な家を建ててくださいというのを個人の方に押しつけるわけにはいきませんので。ただ、家そのものに関して言えば、今回の新潟県中越地震でも、土砂崩れとか、地盤の非常に弱いところは別にして、普通のところに立っている家の倒壊率というのは、非常に低いですよ。そんなに倒れるものじゃないということと、もう1つ、今回も思ったんですけども、地震で、どうしても揺れが大きくなりますから、家の中のものがいろいろ倒れたりしますね。それで、身体的に被害を受けるというのがありますが、それ以上に心理的に悪影響を及ぼすので、家の中のいろんなものが倒れないようにするというのが、僕は必要じゃないかと思うんです。

今回、中越地震で、家に帰りたくないというのは、家が荒れたままですよ。幾ら揺れが大きくても、建具がちゃんとそのまま立っているという状況だったら、帰ろうと思うんだけど、帰ったら、いっぱい散らばったままだし、しかも、がらがらとくるという、要するに精神的に、PTSDじゃないですけども、そういうこともあるので、小さい地震でも何でも、地震で物が落ちたりすることがないようにする。それで、地震のときの行動が随分変わると思います。それは皆さんぜひ実行していただきたいと思います。

## 司会（赤井）

先日も震度5弱の地震が起こりまして、ヘルメットなど防災用具が新宮市では売り切れになったというような話も伺ったんですが、大きいのが起こった直後というのは、皆さん気をつけるんでしょうけどね。

## 松村

大体がそうなので、行政の方たちに文句を言うわけじゃないですけども、行政のそういう担当している人たちが、何年かごとにどんどんかわりますよね。だから、そういう地震の経験をした人の知識とか知恵が蓄積されていない。神坂先生が文化は伝承しないといけないとおっしゃっていましたが、そういう経験が伝わっていかないというのは、地震の場合も非常にあるわけです。特に、津波の影響とか、揺れとかいうものは、だから、後世に伝えていけない。それは、役所の文書としてじゃなくて、個人的に伝えるというようなことも含めて伝承していかないと、身につかないんじゃないかと思えます。

## 司会（赤井）

貴重なお話を聞かせていただきまして、ありがとうございました。

ということで、今回、歴史流れる「熊野川」を語る～世界遺産と文化、暮らしと災害～というテーマでパネルディスカッションを進めてまいりましたが、そろそろ終わりの時間が近づいてきたようでございます。短い時間では語り尽くせないと思うんですが、お話を聞かせていただきまして、さまざまな顔を持つ熊野川のことが改めてわかってまいりました。

先ほど江頭先生もおっしゃっていたんですが、まさに日本の川の縮図なんだなというふうに感じました。そして、このはかり知れない川とつき合っていくためには、これまで人間が築き上げてきた伝統、文化、技術、それとともに知恵と心というのが必要なのではないかというふうに感じました。そして、もちろん、そこに住む人が一番幸せを感じる河川整備というのも必要ではないかというふうに思いました。

さて、それでは、もう少しお時間がございますので、傍聴していただいています皆様から、もしご質問などございましたら、ここでお受けしたいと思えます。広い会場ですので、手を挙げたりするのも緊張してしまいますが、遠慮なさらずに、やさしいパネリストの方ばかりでございますので、いかがですか。地震のことで結構です。今皆さん一番関心がおありかと思えますが。

先ほどのお話で、パーフェクトでしょうか。委員の方々でも結構ですが、いかがですか。これを聞いてみたいということがございましたら。

### 傍聴者

地震との関係もございますけれども、熊野川の清流がどうのこうのという話がかかなり長い間ありまして、熊野川の清流を取り戻すためにはどうしたらいいかという話もしばしば聞くわけですが、先ほど山本殖生先生がおっしゃいましたように、船下りをするのにも、護岸の問題があると。しかも、山紫水明とうたわれているこの地域の熊野川が、ダムのおかげで、清流にきちんとなりにくいと。そういう困難性とダムとの関係、上流にダムが幾つかあるわけですが、濁りの原因とともに、ダムができてから50年近くなっていると思いますので、耐用年数とか、大きな地震で、ダムなんかは決壊しないものなのかどうか、その点、1つお聞かせ願えたらと思います。

### 司会（赤井）

これは、松村先生のご専門とは少し外れますね。

### 松村

私は、工学ではないので、ダムの強度というのはよくわかりません。1つ感じているのは、ダムの場合だけじゃなくて、今まで情報の公開が言われているんですが、安全だという話はあっても、危険だという話はないわけです。私の感触で言えば、普通、ダムの設計のときには、マグニチュード8ぐらいの地震が起こっても平気につくってあるから、安全だと思んですが、安全だ、安全だと言っているだけじゃなくて、それだったら、マグニチュード8.7ぐらいの地震 - - 起こり得ないけれども、起こったらどうなるのかと。どこまではもちますよというんじゃなくて、これ以上きたらもたないですよというのを本当は知らせるべきだと思うんですが、なかなかそういうことは実現していません。

### 司会（赤井）

具体的な数字が出てくればいいということなんでしょうね。これからの大きな課題の一つかもしれません。貴重なご意見、どうもありがとうございました。

ほかにはございませんでしょうか - -。

ご意見がないようですが、パネリストの方は、これがまだしゃべり足りないということはございませんでしょうか。

### 神坂

何もございません。



**司会（赤井）**

ありがとうございます。ぜひまたこのような機会を設けまして、皆様の楽しいお話を聞かせていただきたいと思います。パネリストの皆様にもう一度大きな拍手をお送りくださいませ。（拍手）ありがとうございました。

以上をもちまして、きょうの予定、すべて終了させていただきます。第1回熊野川懇談会、ここで閉じさせていただきます。

きょうは、雨の中、本当にたくさんの皆様ご来場いただきまして、ありがとうございました。そして、委員の皆様も、長時間ありがとうございました。

どうぞお忘れ物などございませんように、お足元にお気をつけて、お帰りくださいませ。またこういう機会がありましたら、ぜひご参加いただきたいと思います。

本日はまことにありがとうございました。（拍手）